

“All American Selections”から学ぶ、
日本の園芸ブーム再興のための花壇用植物コンクールの提案

池田朱里

Holding a new Bedding Plants Contest Based on “All America
Selections” for Revival Gardening boom in Japan.

IKEDA Akari

Abstract

The International Garden and Greenery Exposition, Osaka, Japan, 1990 brought new wave to Japanese gardening culture. The exposition increased female gardening fans enjoy flowers as a scenery and stimulated gardening industry. However, current Japanese gardening industry has been shrinking after 2000. one of the reason of the shrink is lack of information about plants and gardening. On the other hand, the industry is still expanding in America. Therefore I focused on a contest “All America Selections” which has high reliability and influence for gardening industry held in America.

So I suggested to hold a new reliable contest based on “All America Selections.” In chapter 1, I searched current situation of gardening industries both in Japan and America and it was revealed that Japanese gardening industry was shirking and American one is expanding. In chapter 2, I searched some contests holding in Japan and America now. Compared with them, American contest is more informative and reliable. But Japanese one also had some strengths. And in chapter 3, I suggested a new bedding plants contest based on “All America Selections” and some Japanese contests to revival gardening boom in Japan.

序論

1990年に大阪で行われた国際花と緑の博覧会は、日本の園芸界にガーデニングという新しい風をもたらし、これまで男性の趣味という趣が強かった園芸の世界に、景観として植物を楽しむ女性も加わり始め、園芸業界を盛り上げた。しかし、不況のあおりを受けたためか、2000年を過ぎたあたりからブームが去り始めており、現在の日本の園芸業界は目で見えるほどに縮小傾向にある。園芸店は次々に無くなり、ホームセンターの園芸コーナーは縮小されていき、植物の展示会の来場者数も、肌で感じるほどに減ってきている。実際数値で調べてみると、全盛期である1998年には切り花、鉢もの、花壇用苗ものの合計卸売金額が6,000億近かったものの、そこから年々下がっていき、2008年の時点で4,000億ほどまで下がった。国際花と緑の博覧会で巻き起こったブームは完全に去ってしまった。一方、アメリカの花き卸売金額は、1998年の1ドル100円計算で3,000億ほどから、少しずつ金額を増やし、2008年の時点で4,000億ほどまで増加し、その後も2015年まで多少の増減をしながらその数値を保持している。

このように、日米間で大きな差がある要因として、人口の変化や文化、生活スタイルの違いなど、様々なものが挙げられるが、影響力が大きい要因の一つとして、花きや園芸に関する情報量が挙げられるのではないだろうか。正確で、詳しい情報があまり出回っていないと、人々は育てやすい品種や、丈夫な品種、適切な栽培方法を知らずに栽培することになり、それが栽培に失敗する可能性を高める。そして、その失敗体験が新規参入者の園芸離れを生み出す。また、生産者の立場から見ても、品種の良し悪しや適切な育て方を、信頼できるデータとして記録され、公にされることは、より良い品種を作るモチベーションにつながり、また、園芸家に適切に育ててもらえる喜びを感じるだろう。消費者も、良い品種には、その品質に見合った価格を支払うため、園芸業界が経済的にも活発化することにもつながる。

そこで、アメリカで行われている、All America Selectionsという、非常に信頼性と影響力のある花壇苗品種のコンクールに着目した。本論では、All America Selectionsのように信頼が厚く、影響力のあるコンクールを日本に導入することを提案する。

第1章では日本とアメリカの園芸業界の現状を明らかにし、第2章で、日米で行われている花きコンクールについて調査し、考察する。そして第3章で、日本で行うべき花壇用植物コンクールを提案する。

なお、紙面の関係で第1章は要約のみとした。

第1章 日米における園芸業界の現状

日米では、花きの生産状況や販売量が大きく異なる。その違いを花きの卸売金額や人口の増減などの、多角的な方面から考察し、実際のデータを用いて明らかにするとともに、その違いの原因を究明する。

第1節 日本における園芸業界の現状

日本は1990年に大阪で開催された国際花と緑の博覧会により、ガーデニングブームが起き、これまで男性の趣味という趣が強かった園芸業界に、より景観性を重視するガーデニングが導入された。農林水産省の花き流通統計調査報告より、切り花、鉢花、苗の3種類の卸売金額を調べたところ、日本の花き業界全体として、1998年以降縮小傾向にあることが読み取れた(第1図)。また、日本の花き業界で最も流通しているものは切り花であり、その他の鉢花と苗を合計した数値の、倍以上の金額の売上を占めている。ここからも、日本人は園芸やガーデニングとして栽培するより、冠婚葬祭などの行事として切り花を使う機会が多いと推察された。消費者の母数となる国の総人口も、消費者増減の要因となり得るが、日本は人口そのものも2010年以降急激に減少している。将来的にも下がり続け、2095年には日本の総人口が現在の半分以下の5千万人にまで減少すると予想されている。

以上の要因から、ガーデニングブームをもたらした、国際花と緑の博覧会が開催された1990年代の全盛期に比べ、現在は確実に園芸業界が衰退しており、そもそも消費者となり得る母数の人口が減る中、今後も園芸業界が現状のまままで再興することはほぼ見込めない。

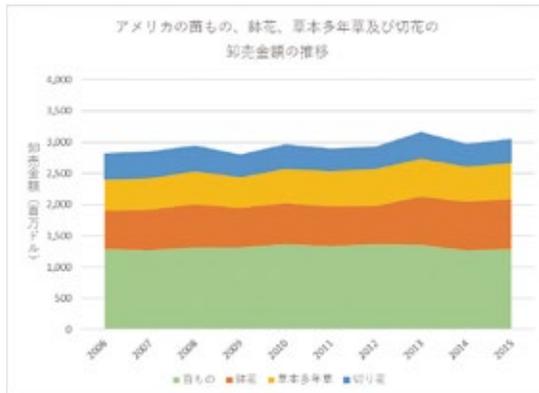


第1図. 日本の切り花、鉢花及び花壇苗の卸売金額の推移
農林水産省「花き流通統計調査報告」より筆者作成

第2節 アメリカにおける園芸業界の現状

ここからはアメリカにおける園芸業界の現状について記述する。

アメリカでは、United States Department of Agriculture. Floriculture Crops Summary をみると、1999年から2002年頃に急激に花きの卸売金額が上がっており、この急激な上昇の後も、変動はあるものの、2015年まで緩やかに上昇していることが読み取れた。National Gardening Association(2014)によると、2013年の時点で、アメリカの家庭の3分の1は食物を自宅で栽培しており、年に35億ドルをフードガーデニングに費やしている。また、アメリカではコミュニティーガーデンが広く利用されており、アメリカ、カナダには18,000のコミュニティーガーデンが存在する。さらに、アメリカにおける苗物、鉢花、草本多年草及び切花の卸売金額の推移を調べると、アメリカでは苗ものの卸売金額が最も高く、鉢花、草本多年草及び切花よりも倍近く、ないしそれ以上の差があることがわかった(第2図)。以上のことから、アメリカでは園芸の人気は根強いと推察された。アメリカにおける人口の推移を見ても、1995年から2016年現在まで確実に増加し続けており、花きの消費人口減少の恐れもない。



第2図. アメリカの苗物、鉢花、草本多年草及び切花の卸売金額の推移
United States Department of Agriculture. Floriculture Crops Summaryより筆者作成

第2章 日米で行われている花き品種コンクール

日米ではそれぞれ独自の花きコンクールを行っている。これらのコンクールを調査し、コンクールの意義や価値を探る。

第1節 アメリカで行われている花き品種コンクール

アメリカではAll America Selections という大きな花壇用花卉のコンクールが毎年

行われている。第1節ではAll America Selectinsという組織と、その活動について、詳細を明らかにする。

All America Selections

All America Selections(以下、AAS)とは、信頼のおける花きの情報を得るために創られた非営利団体であり、北アメリカにある最も古い花と食用品種の独立試験団体である。4人の幹部と6人の理事で運営しており、National Garden Bureauの姉妹団体である。1932年に設立され、初の受賞品種ならびに受賞者は翌年の1933年に発表され、その後毎年発表されている。

団体のミッションとして、北米で、公平な試験によって評価された、優れたガーデンパフォーマンスを持つ新品種を販売促進することを掲げており、その目的は、新しく、未発売の品種を試験すること、園芸家たちにAASを知らせること、AASに対する園芸家たちの信頼を獲得することを挙げている。キャッチコピーは”Tested Nationally & Proven Locally™” で、直訳すると「全国的に試験され、ローカルに証明される」である。

AASのコンクールには、新品種で未発売のもののみエントリーができる。エントリーフォームに、エントリーする品種のハウスで栽培した際の平均的な高さ、移植推奨サイズ、到花日数、花色、販売側の利点、園芸家の利点、類似品種について等の詳細を記載し、エントリー品種の写真と共にメールで送る。食用アブラナ属、スイカ、メロンは検疫検査必須のため、分析成績表のコピーの提出が必要である。さらに、エントリー料を支払う。エントリー料はエントリーする品種の繁殖形態によって異なり、種子系品種は600ドル、栄養系品種は1,000ドル、多年性草本品種は1,200ドルとなっている。エントリーフォーム提出期限は、食用品種、観賞用種子系品種、観賞用栄養系品種は11月1日で、多年性草本品種は9月1日までと決まっている。種の郵送等については書類受理後、指示される。

審査体系は、観賞用種子系品種、観賞用栄養系品種、食用(果物や野菜など)種子系品種、そして2019年に初めて受賞者が発表される多年性草本の4体系である。賞体系は3種類で、そのうちの1つであるAAS Gold Medal Awardは10年に数回しか贈られない。他の2種類はAAS National AwardとAAS Regional Awardであり、Nationalは北アメリカ全土で、Regionalは特定の地域で認められ、与えられる賞である。受賞数は決まっておらず、年によって様々である。審査員は、毎回人数が変わるが、2017年現在は85名のボランティアが審査している。審査はプロの園芸家がいる試験用の花壇にて行われ、試験品種の隣に、比較用の品種を同時に栽培して審査される。試験品種は

到花日数の短かさ、病害虫耐性、新しい花色・香り・形、総収量、開花持続性、収穫期の長さ、総合的なパフォーマンスといった項目で、5点満点で採点される。ここ10年は2項目以上の改良点がないと受賞することができない。受賞結果は11月、1月、7月の年3回発表される。

また、AASはLandscape Design Contestも行っており、これは過去5年で発表されたAAS受賞品種を使ったディスプレイガーデンのコンテストである。80年以上前の受賞品種もガーデンに取り入れることができる。大学や、種苗会社、公共のガーデン、コミュニティーガーデン等がコンテストに参加している。審査員は2017年現在4名で、デザインやガーデンの魅力、AAS受賞品種の使い方の独創性、AASやこのコンテストをどのように宣伝しているか、写真と説明、AAS受賞品種がどれだけ使われているかの5項目を各項目20%で評価する。これらの項目から、Landscape Design Contestは、AAS受賞品種の宣伝媒体の一つとしての側面が大きいと推測した。

All America Selections 受賞データ

AASは1933年から今日まで、毎年受賞者が発表されており、その数は、2017年6月現在791品種に上る。さらに、Gold Medalを受賞した品種は48品種である。食用品種は358品種、栄養系品種は6品種、種子系品種は427品種受賞しており、これらのうち、食用品種を除く433品種と、食用品種に分類されていたペチュニア2品種を含めた435品種のデータを分析し、これらのデータから、アメリカや全世界の花きの現状を読み解いた。

今回分析に使用した435品種全ての花卉の受賞回数一覧を第1表に示した。最も受賞している花卉はペチュニアの70品種で、2番目のマリーゴールドとジニアを20品種以上上回っている。ペチュニアはAASが始まった2年目の1934年から1960年ごろまで、ほぼ毎年受賞しており、その後も2017年現在まで1~5年毎に受賞し続けている。しかし、品目別Gold Medal受賞回数(第2表)を見ると、ペチュニアのGold Medal獲得回数は3回と、決して少なくはないが、最も多いジニアの7回に比べると不釣り合いな数字である。一方のジニアも受賞回数は2位の49回である。Gold Medal受賞一覧(第3表)の通り、ジニアの受賞年度もペチュニア同様、初期から現在まで定期的に受賞している。Gold Medalを受賞した品種は、Peter Panシリーズが2品種、Profusionシリーズが3品種と、特定のシリーズがよく評価されており、そのシリーズの改良度合が非常に高かったことがわかった。また、第3表から、AASが始まって最初の3年間は年にいくつかの品種がGold Medalをとっており、上記したように10年に数回しか受賞しなくなったのは1940年以降のことであることがわかった。ペチュニアはGold Medal

第1表 All America Selections品目別受賞回数一覧

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11~
アイスランドホビー アリスターシェ アウラタム アンタロニア ウシノシタグサ オスマキ ガウラ ガウニア クジャクノウ クリサンセマム コキア コレオプシス サンヒタリア シキタリス シナワスレナグサ シヤスターチーシュー ストウク タリア ディアスキア トウジンビエ トリトマ トリトマ トレニア ニューギニア・インパチェンス ノコギリソウ ハイビスカス バジル ハボタン ハンネマニア (ケシ) ビシヨナチシヨ ペゴニア ペニジウム ラベンダー リナリア ルヒナス ワスレナグサ	エキチセア カスミノウ カンナ クレオメ オトニア デルフィニウム トルコギキョウ ニールンベルギア ペンスギモン ポーチュユカ ヤグルマギク	アリッサム オスチオスベルマム カーネーション カンパニュラ ニコキアナ ひまわり ロベリア	カレンデュラ スイートピー スカビオサ ナスダキウム	アサガオ インパチェンス ガイラルディア ピオラ	ホリホソク フロックス	フロックス	観音開トウガラシ	アスター サルビア	コスモス パンジー	ゼラニウム ニホニホソウ ダイアンサス セロシヤ バーベチヤ キンギョソウ ジニア マリゴールド ペチユニア 70

All America Selections サイトより筆者作成

第2表. All America Selections品目別Gold Medal受賞回数一覧

1	2	3	7
アサガオ カンパニユラ コレオブシス セロシア リナリア ロベリア	コスモス ナスタチウム	カレンデュラ ペチュニア マリーゴールド	ジニア

All America Selections サイトより筆者作成

第3表. All America Selections Gold Medal受賞一覧

年	花名	品種名	ブリーダー
1933	カンパニユラ	Annual Mixed	Waller-Franklin Seed
1933	ナスタチウム	Golden Glem	Bodger Seeds
1933	マリーゴールド	Guinea Gold	Watkins & Simpson
1934	カレンデュラ	Chrysantha	Bodger Seeds
1934	カレンデュラ	Sunshine	Bodger Seeds/W. Atlee Burpee Co.
1934	ペチュニア	Pink Gem	Waller-Franklin Seed
1934	リナリア	Fairy Bouquet	Watkins & Simpson
1934	ロベリア	Rosamond	Bodger Seeds
1935	カレンデュラ	Orange Shaggy	Vaughan's Seed/Waller-Franklin
1935	コスモス	Orange Flare	Bodger Seeds
1935	ナスタチウム	Scarlet Gleam	Bodger Seeds
1935	マリーゴールド	Yellow Supreme	Hurst & Son
1936	ペチュニア	Flaming Velvet	Sluis & Groot
1937	マリーゴールド	Crown of Gold	Waller-Franklin Seed
1939	アサガオ	Scarlett O'Hara	Waller-Franklin/Dallas Seed
1950	ペチュニア	Fire Chief	Bodger Seeds
1963	ジニア	Thumbelina	Bodger Seeds
1966	コスモス	Sunset	Dai-Ichi Seed
1971	ジニア	Peter Pan Pink	Weddle Plant Research Labs
1971	ジニア	Peter Pan Plum	Weddle Plant Research Labs
1974	ジニア	Scarlet Ruffles	Bodger Seeds
1989	コレオブシス	Early Sunrise	W. Atlee Burpee Co.
1999	ジニア	Profusion Cherry	Sakata Seed
1999	ジニア	Profusion Orange	Sakata Seed
2001	ジニア	Profusion White	Sakata Seed
2004	セロシア	Fresh Look red	Benary Seed

All America Selections サイトより筆者作成

第4表. All America Selections Gold Medal受賞育成者別受賞回数とGold Medal受賞品目

育成者	総受賞数		受賞品種							
	総受賞数	GM受賞数	カレンデュラ	コスモス	ジニア	ジニア	ナスタチウム	ナスタチウム	ペチュニア	ロベリア
Bodger Seeds	50	8								
Sakata Seed	41	3								
Waller-Franklin Seed	34	3	カンパニュラ	ペチュニア	マリーゴールド					
Weddle Plant Research Labs	6	2	ジニア	ジニア						
Watkins & Simpson	3	2	マリーゴールド	リナリア						
W. Atlee Burpee Co.	55	1	コレオプシス							
Benary Seed	20	1	セロシヤ							
Sluis & Groot	14	1	ペチュニア							
Hurst & Son	10	1	マリーゴールド							
Dai-ichi Seed	2	1	コスモス							
Vaughan's Seed/Waller-Franklin		1	カレンデュラ							
Waller-Franklin/Dallas Seed		1	アサガオ							
Bodger Seeds/W. Atlee Burpee Co.		1	カレンデュラ							

All America Selections サイトより筆者作成

第5表. All America Selections育成者別総受賞回数

育成者	GM受賞数	総受賞数
W. Atlee Burpee Co.	1	55
Bodger Seeds	8	50
Sakata Seed* ¹	3	41
PanAmerican Seed		38
Waller Flowerseed* ²	3	34
Takii & Co., Ltd.		21
Benary Seed	1	20
Goldsmith Seeds		18
Sluis & Groot	1	14
Ferry-Morse Seed		13
Denholm Seed		11
Hurst & Son	1	10

All America Selections サイトより筆者作成

10回以上受賞した育成者を受賞回数降順で作成。

*¹ Sakata Ornamentalsの受賞回数を含む

*² Waller Flowerseed の企業名称変更前のWaller-Franklin Seedの受賞回数を含む

受賞3回のうち、2回はその初期に受賞したものであるが、ジニアは受賞が困難になった1940年以降にしかGold Medalを受賞しておらず、本当に革新的な改良がなされた品種が多く現れたことが伺える。

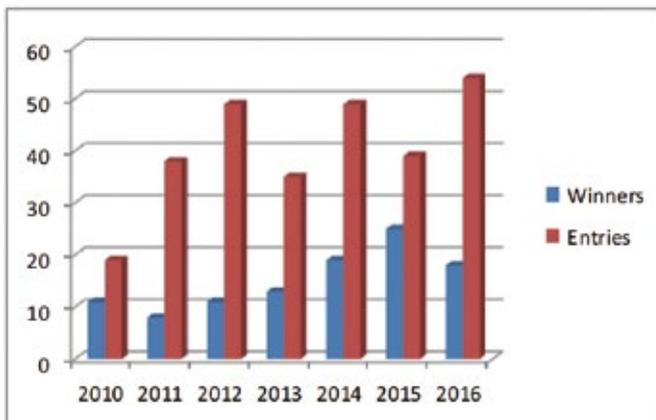
育成者に着目すると、Gold Medalを獲得したことがあるのは13団体で、最も受賞しているのは受賞回数8回のBodger Seedsである（第4表）。受賞品目は、ナスタチウムの2品種以外は全て異なる品目で受賞しており、幅広い品目に対し、高い技術力で開

発に取り組んでいることが推測できる。一方、Sakata Seed はGold Medal 受賞3回の全てをジニアのProfusionシリーズで受賞している。このシリーズの開発に力を入れて取り組んでいて、これらを受賞した2000年頃に実を結んだ結果であろう。この後もProfusionシリーズの複数品種がNational Awardを受賞しており、2017年もProfusion Redで受賞を果たしている。また、10回以上賞を受賞している育成者を第5表に示した。8回という、突出して多くGold Medalを受賞したBodger Seedsは、総受賞数も50回と多いが、さらに多い55回の受賞をしたW. Atlee Burpee Co. のGold Medal受賞回数は1回と少なく、その他の企業も、総受賞数が10以下でもGold Medalを受賞している企業もいくつかあるため、総受賞数とGold Medal受賞数は比例しておらず、関係性は薄いことがわかった。

また、出品者と受賞者の比較の第3図を見ると、出品数の半数以上が受賞していることもあるが、年々出品数の増加に伴い、受賞数の割合は下がってきている。

第2節 日本で行われている花き品種コンクール

日本にも、アメリカのAASを模したようなコンクールが存在する。この日本版AASである、ジャパンフラワーセレクションについて調査した。また、フラワートライアルジャパンという、業者向けの展示商談会と、それに併催されている、フラワートライアル大賞についても調査した。



第3図. All America Selections 出品数と受賞数の比較
All-America Selections Annual Report June 2016より出典

(1) ジャパンフラワーセレクション

ジャパンフラワーセレクション(以下部分的にJFSと略称)は、2006年4月からスタートした、日本で初めての新品種のコテストであり、日本人の感性に訴える優れた品種を、花の美しさや特性に加えて、育てやすさや購入しやすさなどの市場性や商品性も評価し、選定、発表している。苗木部門では花壇での栽培試験を行っている。主催は、平成17年10月21日に設立したJFS実行協議会で、財団法人日本花普及センター、日本花き取引コード普及促進協議会、静岡県等で構成されており、農林水産省の平成17年「花き産業復興方針」に則した事業である。

JFSの目的は、優れた新品種を生活者へ推奨すること、日本における新品種の情報収集と発信をすること、その成果を国内外の消費者や生産者、流通関係者へ積極的に発信すること、さらなる新品種の開発・導入を推進すること、新品種を切り口とした需要拡大を目指すことである。キーワードとして「いい花の新基準。」を掲げている。

受賞は切り花部門、鉢物部門、ガーデニング部門に分けられ、それぞれ年に2,3回程度受賞者が発表される。また、年末にその1年間に受賞した品種から、最優秀賞などが発表される。

鉢物部門と切り花部門の出品は、公式サイトで募集されている各イベントの審査会で、定められた期日までに、出品申請書と花材出荷通知書をメールかファックスで送り、その後折り返してくる詳しい搬入方法等の指示に従う。出品申請書には、出品者の情報と、出品品種の花色、規格や出品数量と、セールスポイントを100字以内で記入する欄等がある。ガーデニング部門は、イベントと併催しているわけではなく、年中各シーズンの審査会の募集をしており、サイト内に応募の詳細は掲載されていない。そのため、応募するには、JFS実行委員会の事務局に問い合わせして、詳細の連絡を取るようである。ガーデニング部門審査結果の発表の資料に、次回の審査会の案内が掲載されているが、こちらにも具体的な応募方法は記載されていない。出品料は、ガーデニング部門は32,400円、ただし日本花普及センターの賛助会員のうち、団体Aもしくは団体会員Aである都道府県内の生産育種農家、または全国新品種育成者の会の会員と、全国新品種育成者の会の会員は、特別価格の10,800円である。鉢物、切り花部門は、審査会によって出品料が異なるようであるが、今現在出品者を募集している審査会の出品料等の情報のみ掲載されているため、正確な情報は不明である。

JFS出品対象品種は①日本での種苗登録もしくは本格的な販売開始から概ね5年以内の品種で、②日本における商業的な生産・流通、販売が期待されるものであり、海外で育種されたものも含む。またJFS出品申請者資格は、①品種の育成権者を持つ者か、②契約により日本における販売代理を持つ者に与えられており、海外で育成された

品種も出品可能である。

受賞品種は、認定登録を行うことで、JFS認定マークを利用した販売・広報活動が5年間可能となる。認定登録は原則、受賞後6ヶ月以内に行い、5年間の利用に42,000円の登録料を支払うことで登録できる。JFS受賞マークは、日本花き取引コードが入ったタイプとないタイプがあり、それぞれ6パターンずつ、計12種類のデザインがある。また、JFS広報マークもあり、こちらはJFSの認知普及のために利用され、誰でも利用が可能である。また、JFS認定品種はジャパンフラワーセレクションの公式サイトで閲覧できる。ガーデニング部門は、推奨ポイント、品種の特徴・審査講評、管理方法が紹介されている。また、栽培記録も閲覧でき、生長具合を視覚的に確認することができる。現在17品種がJFS認定品種として紹介されている。鉢物部門は、品種によって品種情報が全く統一されておらず、小売店や生産者にとってのメリットが掲載されているものもあれば、育種にまつわる話を記載しているもの、管理方法が掲載されているものなど、内容も情報量も様々である。また、このサイトで受賞品種を購入することはできない。

賞は、各審査会で選定されるものと、毎年11月の中央審査委員会で選定される、年間を通じた賞がある。各審査会で選定されるJFS賞は、10点満点で7.0点を基準とし業界として推奨できると認められた品種に与えられ、認定登録を経てJFS受賞品種として販売が可能となる。さらに、年間を通じて各審査会で受賞した品種のなかで、特に優れた品種には3種類の賞が授与される。1つ目はフラワー・オブ・ザ・イヤーと呼ばれる最優秀賞で、各部門の中で最も優れた1品種に授与される。2つ目はベスト・フラワー賞と呼ばれる優秀賞で、各部門で、姿、形、デザインに加えて、栽培のしやすさなど、全体的にバランスの良い、9.0以上のスコアを取った、優れた品種に授与される。3つ目はJFS特別賞で、花卉業界にとって意義があり、新しい可能性を感じさせ、特別なインパクトを与えた品種に授与される。現在10種類の特別賞が存在するが、該当品種が見当たらない年は授与されない。

なお、1つの品種が複数の特別賞を受賞することも、1つの特別賞を複数の品種が受賞することもある。①モーストジョイ特別賞は気分を彩る品種で、その花があるだけで、喜びに満ち、楽しい気分などをもたらしてくれる品種に授与される。②ニューバリュー特別賞は花の新たな価値観をデザインする品種で、フラワーデザイン、ガーデンデザインの多様性や可能性を広げて花文化の未来に貢献する品種に授与される。③グッドパフォーマンス特別賞はこれまでに比べて生産効率の高さを感じさせる品種で、生産者にとっても消費者にとっても扱いやすく、育てやすい品種に授与される。④プリーディング賞特別賞は育種技術により花の商品性を高めた品種で、こ

れまででない価値観や形質を生み出し、育種の開発コンセプト、育種技術が優秀で、デザイン性、商品性の高い品種に授与される。⑤カラークリエイティブ特別賞は花の色の流行を先取りした品種で、人の色彩の感性に訴えて、新たな花色の創造を期待させる品種に授与される。⑥フレグランス特別賞は芳香がうるわしく、香りのデザインが優れた品種に授与される。⑦ジャパンデザイン特別賞は日本らしさを持ち、日本の美意識やデザイン性を感じさせる品種に授与される。⑧ニュースタイル特別賞は斬新で優れた形状を持つ品種で、これまででない新たな花型、葉型、草姿等を持ち、業界にインパクトを与えた品種に授与される。⑨ライフデザイン特別賞は高いデザイン性と、消費者にとって扱いやすい特性を持ち、それがあって日々の生活を楽しくさせ、また、生活空間を豊かにしてくれる品種に授与される。⑩モニター特別賞は各展示、審査会で、一般消費者のモニター調査の結果、各部門でトップとなった品種に授与される。

審査会における審査員団は、中央審査委員会によって編成・派遣され、1グループに中央審査委員会の委員が1名以上加わり5名以上の構成で審査を行う。中央審査委員は、委員長、2名の副委員長、30名の委員で構成されている。審査委員は国内の花き業界を代表する学識経験者、流通関係者、小売関係者、造園・デザイン関係者などで編成されている。

公式サイトでは、過去全ての受賞記録を閲覧することができる。またJFS認定品種に関してはより見やすい形で詳細のページが設けられており、購入こそできないが、栽培方法や成長記録を写真で見ることができる。しかし、リンク先が異なる審査会の結果であったり、リンク先が見つからないエラー表示がでることも多く、また、細かい情報を開示しない年があったりと、不備が多く、信ぴょう性に欠けると言わざるを得ない。また、タブを切り替えるリンクも多く、使いづらさを感じる。特にJFS認定品種の詳細ページは、様々な品種を次々と閲覧するため、タブが次々に開かれると煩わしさを感じる。

ジャパンフラワーセレクション受賞データ

JFSには現在、鉢物部門、切り花部門、ガーデニング部門の3部門あるが、本論では現在のガーデニング部門の受賞について調べた。ガーデニング部門は、JFSが始まった2006年から2007年までは花壇苗部門と呼ばれており、2008年からコンテナ苗部門が追加された。しかし、2011年にはそれら2つの部門は統合され、苗物部門と名称が変わった。さらに、2014年ガーデニング部門と名称変更され、現在に至る。2017年6月現在、リンクエラー等でみることができないデータを除く、閲覧可能な219の受賞品種

について、その特徴を分析した。

第6表は出品者ごとの受賞回数である。団体数は37で、サントリーフラワーズ株式会社の48回と、株式会社サカタのタネの39回が突出して多い。海外からの出品は3団体で、PanAmerican Seed Co. は2007年のみ、Ball Horticultural Company は2009年のみ、Morel Diffusion SAS は2008年と2013年に出品しており、海外勢の定着はそれほど見受けられない。また、PanAmerican Seed Co. はAASでも受賞しているが、他2社はAASにおいて、少なくとも筆者が今回調査した品種の中では1つも受賞していない。PanAmerican Seed Co. も、JFSで受賞した品種は、AASで受賞していない。

出品品目は出品回数が多い出品者ほど多く見受けられるが、どの出品者も同じシリーズ品種の複数品種を出品していることが多かった。第7表の品目ごとの受賞回数で最も多いペチュニアは46品種が受賞していた。ペチュニアの受賞一覧を見ると、15団体が受賞しており、ほとんどの出品団体がそれぞれシリーズで受賞していることがわかった(第8表)。

第6表. ジャパンフラワーセレクション出品者ごとの受賞回数

出品者	受賞回数	出品者	受賞回数
サントリーフラワーズ株式会社	48	あんだち園芸	1
株式会社サカタのタネ	39	株式会社グブラナガトヨ	1
株式会社エム・アンド・ピー・フローラ	16	株式会社ハクサン	1
Morel Diffusion SAS	11	株式会社ミヨシ	1
タキイ種苗株式会社	11	岐阜県農業技術センター	1
松原園芸	9	小関園芸	1
有限会社 角田ナーセリー	8	静岡県東部花き流通センター農協	1
株式会社赤塚植物園	7	仙波園芸	1
第一園芸株式会社	7	長崎県農林部農産園芸課	1
トキタ種苗株式会社	5	北興化学工業 株式会社	1
豊明花き株式会社	5	有限会社赤井園芸	1
有限会社 綾園芸	5	有限会社石井フラワーガーデン	1
有限会社村岡オーガニック	5	有限会社セントラルローズ	1
ゆうび農園	5	有限会社花安	1
株式会社ハルディン	4	有限会社マルコウ種苗	1
キリン・グリーンアンドフラワー株式会社	4		
キリンアグリバイオ株式会社	4		
PanAmerican Seed Co.	3		
Ball Horticultural Company	2		
株式会社 トーホク	2		
株式会社レイ・ハウス	2		
有限会社 風のみどり塾	2		

ジャパンフラワーセレクション 公式サイトより筆者作成

また、第9表は出品数に対する受賞数の割合を表している。このデータが出ている年度のもののみを取り上げているため、データに不足があるが、これらのデータだけでも入賞率は非常に高く、2009年ほどの部門も1品種を除いた全ての品種が入賞していた。このデータを見ると、お金を払ってJFS受賞というブランドを買っているようなもので、本当に質の高い良い品種とは、消費者としては信じがたい。

(2) フラワートライアルジャパン

フラワートライアルジャパンとは植物生産地に、出店各社が各々の顧客を招待して商談を行う、業者向けの展示商談会である。

2017年に行われる本商談会は、フラワートライアルジャパン2017秋実行委員会が主催で、株式会社グリーン情報が毎年実行委員会を立ち上げているようである。こ

第7表. ジャパンフラワーセレクション受賞品目ごとの受賞回数

受賞品目	受賞回数	受賞品目	受賞回数
ペチュニア	46	カレンデュラ	2
ビオラ	19	セロシヤ	2
パンジー	13	ニューギニアインパチェンス	2
カリブラコア	12	フロックス	2
シクラメン	11	ペゴニア	2
ニチニチソウ	8	ユーフォルビア	2
キンギョソウ	7	アルテルナンテラ ポリゲンス	1
マンデヴィラ	7	イネ	1
ダイアンサス	6	ガーデンマム	1
インパチェンス	5	キンセンカ	1
耐寒マツバギク	5	皇帝ダリアハイブリッド	1
ポーチュラカ	5	サンパチェンス*	1
ラナンキュラス	5	センニチコウ	1
アルギランセマム属間ハイブリッド	4	ツルレイシ	1
アングロニア	4	トレニア	1
ジニア	4	バラ	1
ヒビスクス	4	ヒマワリ	1
プリムラ	4	プリムラ・ジュリアン	1
アメリカフヨウ	3	ヘレニウム	1
バーベナ	3	マリーゴールド	1
ビデンス	3	メカルドニア	1
マーガレット	3	メランポディウム パルドスム	1
メネシア	3	ラベンダー	1
ロベリア	3	ルビナス	1
エボルブルス	2		

ジャパンフラワーセレクション 公式サイトより筆者作成

第8表. ジャパンフラワーセレクションにおけるペチュニア受賞一覧

年度	審査	品目	品種	出品者
2009	夏秋	ペチュニア	ショックウェーブ・デニム	Ball Horticultural Company
2016	夏秋	ペチュニア	星咲きあんべちゅ〜ピンク〜	あんだも園芸
2007	夏	ペチュニア	リボン ピンクバイカラー	株式会社 トーホク
2007	夏	ペチュニア	リボン レッドバイカラー	株式会社 トーホク
2013	夏秋	ペチュニア	エスプレッソトリュフ	株式会社エム・アンド・ビー・フローラ
2013	夏秋	ペチュニア	F1 タイタンローズハロ	株式会社エム・アンド・ビー・フローラ
2008	初夏	ペチュニア	スーパーカル ネオンローズ	株式会社サカタのタネ
2008	初夏	ペチュニア	スーパーカル ネオンローズ	株式会社サカタのタネ
2012	夏秋	ペチュニア	うすべに姫	株式会社サカタのタネ
2016	夏秋	ペチュニア	スーパーチュニアピスタミニブルースター	株式会社ハクサン
2007	夏	ペチュニア	アンジュラ パープル	株式会社ハルディン
2006	初夏	ペチュニア	スターキッズ グレープペイン	株式会社レイ・ハウス
2006	夏	ペチュニア	スターキッズ ホワイト	株式会社レイ・ハウス
2006	夏	ペチュニア	キリンウェーブ ピンクアクセント	キリン・グリーンアンドフラワー株式会社
2006	初夏	ペチュニア	サフィニアブーケ ストロベリースカッシュ	サントリーフラワーズ株式会社
2006	初夏	ペチュニア	サフィニアブーケ さくら	サントリーフラワーズ株式会社
2006	夏	ペチュニア	サフィニア バイオレットミニ	サントリーフラワーズ株式会社
2006	夏	ペチュニア	サフィニア ローズ	サントリーフラワーズ株式会社
2010	夏秋	ペチュニア	サフィニアサマー ブライトピンク	サントリーフラワーズ株式会社
2010	夏秋	ペチュニア	サフィニアサマー ブライトピンク	サントリーフラワーズ株式会社
2013	夏秋	ペチュニア	サフィニアブーケ キューティーバイオレット	サントリーフラワーズ株式会社
2013	夏秋	ペチュニア	サフィニアブーケ キューティーライム	サントリーフラワーズ株式会社
2015	夏秋	ペチュニア	サフィニアアート ピンクイエロー	サントリーフラワーズ株式会社
2015	夏秋	ペチュニア	サフィニアアート ローズイエロー	サントリーフラワーズ株式会社
2015	夏秋	ペチュニア	サフィニアマックス パープル	サントリーフラワーズ株式会社
2015	夏秋	ペチュニア	サフィニアマックス グレープ	サントリーフラワーズ株式会社
2016	夏秋	ペチュニア	サフィニアアート ブルueイエロー	サントリーフラワーズ株式会社
2016	夏秋	ペチュニア	サフィニアアート ももいろハート	サントリーフラワーズ株式会社
2016	夏秋	ペチュニア	サフィニアアリアル コーラルピンク	サントリーフラワーズ株式会社
2016	夏秋	ペチュニア	ブリエッタ アイエローマジック	サントリーフラワーズ株式会社
2006	夏	ペチュニア	ブリエッタ ホワイト	第一園芸株式会社
2006	夏	ペチュニア	ブリエッタ バイオレット	第一園芸株式会社
2006	夏	ペチュニア	ブリエッタ デュエットローズ	第一園芸株式会社
2007	夏	ペチュニア	ブリエッタデュエットバイオレット	第一園芸株式会社
2007	夏	ペチュニア	ブリエッタワインベルベット	第一園芸株式会社
2006	初夏	ペチュニア	ロンド レッド	タキイ種苗株式会社
2006	初夏	ペチュニア	ロンド ローズモーン	タキイ種苗株式会社
2006	初夏	ペチュニア	ロンド ライトブルー	タキイ種苗株式会社
2006	夏	ペチュニア	サルサ ピンクモーン	タキイ種苗株式会社
2016	夏秋	ペチュニア	妖精のチュチュ フェアリーピンク	松原園芸
2010	夏秋	ペチュニア	おゆきちゃん	有限会社 風のみどり塾
2006	夏	ペチュニア	さくらさくら	有限会社 風のみどり塾・杉井明美
2010	夏秋	ペチュニア	マドンナの宝石ピンク	有限会社村岡オーガニック
2010	夏秋	ペチュニア	マドンナの宝石ピンク	有限会社村岡オーガニック
2012	夏秋	ペチュニア	ソフィアの宝石バイオレット	有限会社村岡オーガニック
2015	夏秋	ペチュニア	ソフィアの宝石 ホワイトピンク	有限会社村岡オーガニック

ジャパンフラワーセレクション 公式サイトより筆者作成

第9表. ジャパンフラワーセレクション部門別出品数・入賞数

年度	部門	出品数	入賞数	入賞率
2006	切花	123	49	40%
	鉢物	48	31	65%
	花壇苗	97	57	59%
2007	切花	69	38	55%
	鉢物	48	29	60%
	花壇苗	45	33	73%
2008	切花	48	39	81%
	鉢物	81	53	65%
	花壇苗	33	25	76%
2009	切花	29	28	97%
	鉢物	46	45	98%
	花壇苗	17	16	94%
2014	切花	51	45	88%
	鉢物	76	67	88%
	花壇苗	14	10	71%

ジャパンフラワーセレクション 公式サイトより筆者作成

の株式会社グリーン情報は1980年に設立され、事業内容は雑誌・書籍の企画・制作・編集、販売、園芸イベント企画・アドバイス、セミナー・ツアー開催などがある。フラワートライアルジャパン事務局は2009年に設立された。

フラワートライアルジャパン2017秋の後援は、農林水産省、長野県、山梨県、日本家庭園芸普及協会、日本花普及センターであった。フラワートライアルジャパンには、園芸用品取扱業社およびメーカー、生産者が出展している。日程・期間は9月下旬頃の3日間で、同じ期間にフラワートライアル大賞が併催されていた。他にもお台場おもてなしセレクション表彰式&情報懇親会in八ヶ岳が併催されていた。出展には、運営費として1社40,000円の協賛金と出展料が必要である。出展料は自分が出展する会場により異なり、茅野市民館の場合、1小間(2.7m×2m)で45,000円、1小間増の度に+30,000円を支払う。他の会場は、その会場の管理者に各自確認交渉し、決定する。会場は、2016年は茅野市民館の他に、サントリーフラワーズやM&B Floraなど、7会場で開催された。2016年は87の企業が出展した。

来場は事前登録制で、未登録やエントリーシート不持参の場合、特定の会場で登録する必要がある。来場者数は全会場トータルで、2010年は1,030人だったが、2013年には2,981人まで大きく増加した。しかし、2014年で2,272人に減少し、その後2016年までほぼ横ばい状態であった。

(3) フラワートライアル大賞

フラワートライアルジャパンと並行して、フラワートライアル大賞というコンテストが開催されている。これは来年のトレンドの指針として注目すべき優れた品種や園芸資材等を選定し、発表するコンテストである。

植物部門とグッドプランニング部門の2部門で審査が行われる。植物部門は、植物の品種そのものの素晴らしさで評価され、グッドプランニング部門は、新たなデザインや、現代のライフスタイルマッチした新しい商品を提案できているかが審査で問われる。このグッドプランニング部門は、元々あった資材部門と2016年から統合され、資材のみのエントリーができず、資材に植物を植えてエントリーするようになった。

園芸関係各社が参加資格を有し、フラワートライアルジャパンへの同時出展の有無は問われない。各社で取扱の新品種・新企画商品で、商業的に流通しているもの、または予定しているものが出品対象で、過去に出品しているものは不可となっている。原則幅50cm、高さ180cm以内で、これを上回る場合は事前に事務局へ相談する必要がある。植物部門は、種苗登録または販売後概ね5年未満の品種、または未発表品種が対象となる。

賞体系は2種類ある。1つ目はフラワートライアル大賞で、植物部門、グッドプランニング部門のそれぞれの部門に最優秀賞1点、優秀賞2点がある。また、2016年は審査員長特別賞も送られていたため、年度によって審査員長特別賞が贈られることもある。2つ目は人気投票賞で、業界関係者や一般消費者が会期中に投票し、後日集計される。こちらも、各部門に最優秀賞1点、優秀賞2点が決められる。結果は後日、メール配信され、「Garden Center」等の業界誌にて紹介される。株式会社グリーン情報のサイトには、過去1年分の受賞歴が掲載されており、受賞作品の品種名と作成企業、見どころが紹介されている。審査員は、2016年の大賞では園芸本の編集長や研究家などの計7名で構成されている。

出品方法は、詳細な記載がないため、初出品の人にはわかりづらい。出品申込書に出品者の情報と、出品品種の名前やサイズと、50字以内で特徴やポイント、発売2年未満の品種かどうかを記入し、締切日までにメールかファックスで送る。そして、指定されている搬入日に出席者名と商品名を記載した紙を送付した出品物と、出品申込書、あれば商品説明のPOPを搬入する。出品物の形態は流通規格品でも、見本品でも可能である。出品料の記載がないため、出品は無料であると考えられる。

フラワートライアル大賞受賞データ

フラワートライアル大賞は2017年で10回目を迎える、比較的新しいコンクールである上に、公式サイトには過去1回分の受賞歴しか掲載されておらず、情報量が非常に少ない。また、掲載されている情報も、作品や品種の情報が非常に少ない。第10表は唯一の受賞データである、2016年の結果である。このデータのほかに各受賞作品、品種に見どころが一言添えられており、それで掲載されている全てのデータである。

受賞13品種・作品全て、出品者が異なっている。しかしこれも情報の少なさ故、偶然なのかは不明である。

第10表. フラワートライアル大賞2016受賞一覧

フラワートライアル大賞2016	植物部門	最優秀賞	ダイアンサス	サニービーライラックブラック	イワタニアグリグリーン樹
		優秀賞	スカエボラ	サンク・エール	サントリーフラワーズ樹
		優秀賞	サルズベリ	ブラックパールホワイト	日本植物パテント樹
		審査員長特別賞	スキミア	フィンチー	和麻野間園芸
	グッドプランニング部門	最優秀賞	熟成胡蝶蘭	キングアマビ和風鉢	松村洋園樹
フラワートライアルコンテスト人気投票	植物部門	優秀賞	ガーデンシクラメン	オールドファッション	たけいち農園
		優秀賞		クリスタルジュエルオーキッド	童仙房ナーセリー&ガーデン
		最優秀賞	ベチュニア	花衣 黒真珠	樹エム・アンド・ビー・フローラ
		優秀賞	カリブラコア	アンティークアソート	和ジョルディカワムラ
	グッドプランニング部門	優秀賞	カリブラコア	スーパーベルホーリーモーリー	樹ハクサン
最優秀賞		テラリウム	Tilandsia Jewel Terrarium	和アライ・サンズ	
優秀賞			プランツビュッフェ	トキタ種苗株	
	優秀賞		ケイトウ	カシミヤデコレーション	和マルコウ種苗

株式会社グリーン情報 公式サイトより筆者作成

第3節 考察

AASの素晴らしいところは、コンクールとしての価値の高さである。まず、1933年から続く伝統と知名度の高さは、そう簡単にマネできるものではない。現在は、2点以上の改善ポイントがないと受賞できない上、名誉あるGold Medalは10年に数回という難易度の高さが、受賞の価値を高めている。さらに、受賞品種の情報量の多さが際立っていた。受賞品種の紹介ページには、栽培方法のみならず、背丈や株が広がった状態のサイズ、花のサイズといった、具体的に自宅で栽培した際のイメージが可能となる情報が多く記載されていた。それらの情報は、エントリー時に出品者によってエントリーフォームに記載してもらうため、主催側の負担にならない。また、公式サイト内で受賞品種の購入ができるため、購入が素早く行え、商品としての宣伝効果が非常に高い。数々の専門家がボランティアとして活躍してくれているところも、非営利団体にとって非常に重要である。100人近いボランティアに賛同してもらえるまで、組織化するには時間を要する。1933年から続く歴史によって、団体のシステムが強固

に形作られている。

しかし一方で、マイナスの側面もある。出品費用が最も安くても約6万円かかり、JFSと比べると、2倍以上のコストがかかる。また、出品数に対する受賞数は、JFSに比べると非常に納得できる割合となっているものの、2015年は半数以上が受賞する結果となっており、ボランティア審査員たちの審査基準の統一性に少々疑問を感じる。しかし、これに関しては、たとえ審査員が甘く点数をつけているようなことがあったとしても、品種の説明が詳細に出ているため、消費者はそこからその品種を判断することができる。

日本のコンクールは、AASと比較すると、まだまだ改善の余地がある。しかし一方で、AASにはない、良い点も存在した。

ジャパンフラワーセレクションは、AASを日本に持ち込んだような目的と活動内容であったが、まだ知名度が低く、あまり機能していないように見受けられた。AASと比べると、出品料は安い、認定マーク利用にも費用がかかり、5年という期限もある。また、出品品種の半数以上は入賞しているため、コンクールとしての信ぴょう性は低く、AASと比べて受賞の価値は低い。出品数も減少、ないし現状維持で、伸び悩んでおり、国外からの参加もほとんどない。また、公式サイトの不備も多く見受けられる。受賞データのリンクが間違っていたり、エラーを起こしていて、正確な結果を閲覧することができなかった。公式サイト改良も課題の一つである。一方で、栽培記録を写真で詳細に閲覧できるため、視覚的に品種の雰囲気を知ることができた。

フラワートライアルジャパンは、2013年まで大きく拡大していたが、2014年で縮小し、その後大きな増減がない。出展者が支払う金銭はコンテスト以上に高いが、2016年は80以上の企業が出展している。これは、業者間の直接的な取引につながるため、利害関係が一致し、ニーズがあるのではないだろうか。

フラワートライアル大賞は、日本で行われている一般的なコンクールスタイルであり、できあがった作品を評価し、表彰している。この場合、審査は非常に簡単で、時間も必要ないことから、費用がかからず、行いやすいという利点がある上、消費者も話題性から関心を抱きやすい。しかし、実際に消費者が同じものを購入して育てても全く育ち方が異なり、園芸離れを生み出す危険性がある。また、ただ受賞作品を見るだけで満足してしまう傾向が強いと考えられる。一方でグッドプランニング賞は現代のライフスタイルに合った提案がなされたものが選出されるため、園芸離れが深刻になる現代の人に植物との新しい付き合い方を提案し、園芸ブームの再興を図る一端となる可能性を感じた。

第3章 花壇用植物コンクールの提案

ここまで、日本とアメリカの園芸業界の現状と、実際に行われているコンクールやトライアルを見てきた。その中で、日本の園芸業界は縮小傾向にある上、人口面でも縮小し続けており、今後も園芸業界の更なる縮小は確実であることがわかった。一方のアメリカは大きな盛り上がりこそみせていないものの、園芸関連の消費が停滞することはなく、緩やかに上昇しており、更に人口も増加し続けているため、今後も大きな問題が起これなければ、向こう数年は減少する見込みは少ない。即ち、日本は何かしらの手を打たなければ、業界が衰退に向かってく一方であるということである。また、日米で行われているコンクールの質や賞の価値も大きく異なっていた。日本で現行しているAASの日本版、ジャパンフラワーセレクションは、組織の構造自体は非常にAASに似ており、可能性を感じる。そのため、日本の園芸業界の再興を図るべくこのジャパンフラワーセレクションをより価値のあるコンクールにするための提案を行う。

まず、アメリカのAASにあって、日本のコンクールにない、日本のコンクールに必要な事柄は、情報量の増加と信頼の獲得である。情報量とは具体的に、受賞品種に関するもので、どの品種も同じ量の情報を掲載するシステム作りを推奨する。現在のジャパンフラワーセレクションは、栽培方法やアピールポイントが紹介されているものの、品種によって情報量が異なっていることが気になった。AASで行われているように、エントリーフォームにあらかじめサイズや耐性などの細かい情報を一つ一つ書き込む欄を用意することで、審査員の負担は少なくすみ、費用もかからずすぐにできることである。また、全ての欄を埋めることで、その品種の弱みも自ずとわかるため、コンクールとしての価値も高まる。さらに、JFSの公式サイトで受賞品種の購入ができることよい。

信頼の獲得については、JFSの今現在の信頼度はかなり低いと言わざるを得ない。JFSは受賞数が出品数に対して非常に多く、90%以上入賞している年もあった。これでは出品すればどのような品種でも入賞できる、入賞価値の低いコンクールと言わざるを得ない。採点方法は現在、10点満点で7.0以上の得点で受賞、となっているが、ここをベスト・フラワー賞の基準である9.0以上に引き上げ、受賞難易度を上げることで大きく解消できると思われる。受賞数が多いほど、追加料金が必要なJFS認定登録をしてもらえる可能性が高まり、そこからの収益を期待しているのであろうと予測されるが、目先の利益を求めるのではなく、コンクールとしての価値を確立し、出品数の拡大を図る方が、将来的な発展が見込めるだろう。

そして実際、ガーデニング部門のJFS認定品種として公式サイトに掲載されていた

のは、17品種で、現在確認できるガーデニング部門総受賞数の219品種のわずか7.8%である。JFS認定期間の5年の期限が切れたものの掲載の有無は確認できなかったが、2011年から2015年の5年間で受賞した52品種で考えても32.7%と、半数を下回っていた。JFS認定してもらうには、やはり受賞の価値を高める他ない。まずは、JFS認定を無料にすることで、受賞品種全てにマークを使用してもらうことができ、コンクールの知名度が上がる。それによりエントリー数を増やし、そこから本当に厳選された優秀な品種を認定することで、信頼度も知名度も獲得できるのではないだろうか。

また、AASが特別良いわけではないが、JFSに大きく欠けている点として公式サイトの質が挙げられる。受賞歴のリンク間違いやリンクエラーが多く、また年によって情報量もばらつきが大きいので、十分な分析を行うことができなかった。出品者も、自分が出品した審査会のページがエラーなどで見れないと、受賞した価値がさらに低下してしまうだろう。公式サイトも改善すべき大きな点である。

一方、日本のコンテストにも良い点があった。まず、JFS、ガーデニング部門の受賞品種の紹介ページに写真付きの栽培記録を掲載している点である。これにより、消費者は自分のガーデンで育てる際に、実際に育ち方をイメージした上で購入できる。AASにも、花のサイズや背丈の表記があったが、育っていく様子の写真があることで、より具体的に、そして視覚的にイメージできるため、両方掲載すると良い。

2つ目は、フラワートライアル大賞のグッドプランニング賞である。この賞は現代のライフスタイルに合わせた提案を選出するため、都会のマンションなどに住み、どうしても園芸とは無縁になりがちな人なども園芸や植物栽培に関心を持ち、参入してもらえる可能性を感じた。庭を持たない人に向けた、新しい植物との関わり方を提案するプランツライフデザインコンクールを併催することを提案する。同コンクールは、現在であれば、文字通り家庭内菜園として、家の中で栽培できる野菜などの品種や、観葉植物のインテリア性や管理のしやすさ等を審査する。インテリア性は、園芸初心者参入させる契機となり、管理のしやすさは、栽培失敗経験による園芸離れを減らすことができる。結果には、JFS同様に品種の詳細を細かく記すことで、園芸初心者にとっても、慣れている人にとっても有益な情報となり、初心者は、栽培の失敗経験を減らす可能性をさらに減らすことができる。また、この新しいコンクールは時代のニーズに合わせて審査項目を変えていき、その時代のライフスタイルに合った提案を行ってみてはどうだろう。コンクールには、AASの研究の際にも、伝統の大切さを痛感したが、伝統作りはJFSで行い、併催するコンクールは時代に合わせて変化させることでバランスが良く、幅広い人に対応できるコンクールとなり得るのではないだろうか。

また、JFSの出品料はガーデニング部門の3万円で、AASに比べて非常に安い。AASで最も安い、種子系品種でも約6万円で、最も高い多年性草本品種は約12万円と、JFSの出品料の4倍にも上る。出品側にとって、この出品料の安さは良い点であるが、上記した提案のように、JFS認定を無料化した場合、利益どころか運営自体が難しくなる可能性がある。さらに、AASではボランティア審査員による審査を行っているため、費用を投資していない、審査員の給料も、おそらくJFSが支払っているため、資金が必要である。そのため、この出品料は値上げすべきである。JFS認定登録料は5年で42,000円であった。これを現在のガーデニング部門JFS認定品種数の17品種を費用として換算すると、714,000円である。また、1回の出品料は30,000円のため、2011年から2015年の5年間で受賞した52品種の出品料の合計は1,560,000円となる。これらの金額を合計して、5年間の出品品種数の52で割ると、43,731円となる。つまり、出品料を1品種45,000円にすることで、現在の利益は維持できる。実際には特定の条件を満たした人に適用される特別料金の1万円で出品している人もいるため、出品料を45,000円にすると現在以上の利益が見込まれる。特別料金をつくるのであれば、一般料金を5万円にし、特別料金を4万円にすれば、特別料金を利用する人が多くても、おそらく現在の利益は維持できるだろう。また、受賞品種全てがJFSの名前を用い、セールスを行うため、必然的に知名度も高まり、出品者も増えることが想定される。出品さえしてもらえれば、経費を賄うための利益が出るシステムであるため、無理に受賞数を増やす必要もなく、きれいな循環が生まれる。

要点をまとめると、まず、①JFS認定を無料にし、②審査の受賞基準点を7.0点から9.0点まで上げる。③出品料は5万円程度まで上げる。④エントリーフォーム記載事項を詳細化し、家庭園芸家が求める項目を増やす。⑤公式サイトを再点検し、エラーや間違いを修正する。また、⑥栽培記録の掲示を今後も続ける。そして可能であれば、⑦公式サイト内で受賞品種の購入ができるようにする。これら7つを行うことで、運営を安定させつつ、コンクールとしての品質と知名度の獲得を図る。そして、軌道に乗ってきた5年後ぐらいに、⑧新コンクール「プランツライフデザインコンクール」を作ることで、園芸とは疎遠な消費者の獲得につながり、ガーデニングブーム再興の大きな一端となるのではないだろうか。

引用文献

一般財団法人日本花普及センター 『フラワーデータブック』'95, 2008-2009
ジャパンフラワーセレクション 公式サイト <<http://www.jf-selections.net/>>

(最終アクセス:2017/06/15)

株式会社グリーン情報 公式サイト <<http://www.green-joho.jp/trial/>>
(最終アクセス:2017/06/15)

M&B Flora 谷本裕司.「フラワートライアルジャパン 2016 まとめ」
<<http://www.green-joho.jp/files/trial/file/1a58e119a7a1463f3d0632629835c94a.pdf>> (最終アクセス:2017/06/20)

農林水産省 花き流通統計調査報告 長期累年統計一覧

高橋ちぐさ・下村孝. 2001. ガーデニングブームの実態と背景—雑誌,出版物を通して見たガーデニングブーム—. ランドスケープ研究 65(1): 27-31

American Community Gardening Association 公式サイト
<<https://communitygarden.org/>>(最終アクセス:2017/06/14)

Countrymeters. 「United States of America (USA) population history.」
<[http://countrymeters.info/en/United_States_of_America_\(USA\)#historical_population](http://countrymeters.info/en/United_States_of_America_(USA)#historical_population)> (最終アクセス:2017/05/31)

International Monetary Fund. 2017. World Economic Outlook Database.

National Gardening Association. 2014. Garden to Table: A 5-Year Look at Food Gardening in America : 4-5

総務省統計局. 『人口の推移と将来人口』<<http://www.stat.go.jp/data/nihon/02.htm>>
(最終アクセス:2017/05/31)

United States Department of Agriculture. Economic Research Service. 「Agricultural Trade」 <<https://www.ers.usda.gov/data-products/ag-and-food-statistics-charting-the-essentials/agricultural-trade/>> (最終アクセス:2017/06/20)

United States Department of Agriculture. Floriculture Crops Summary

(いけだ あかり 2017年9月恵泉女学園大学社会園芸学科卒業)

* 本論文は2017年度提出の卒業論文に加筆修正し、投稿論文としたものである。